

【実践報告】

高校へ不本意入学した不登校生徒への援助

—現在と未来を統合した未来展望の視点から—

木村 佳穂* 苅間澤 勇人**

本事例は、不登校生徒を多く受け入れている私立高校で相談室の非常勤職員として勤務する報告者が、不登校におちいつている女子生徒に対して援助を行った事例である。不登校の背景に強い対人不安と不本意入学があり、他校への再受験の希望があった。報告者は女子生徒の将来に対する考え方から、時間的展望の視点からの援助を行った。当初、女子生徒の未来展望は現実に即さない楽観的な未来志向であった。そこで報告者は女子生徒に対し、来目標を具体的に思考する活動を行わせ、現在と未来を統合した上での未来展望の獲得を目指した。その結果、現在の自分の状態を正確に認識した上で“この先どうするのか”という連続性のある思考を導き出すことができた。また、現在をより深く内省することで内面的成長が促進された。現在と未来を統合した将来に関する具体的な思考は、不登校生徒の進路形成において有効な方法であることが示された。不登校生徒の持つ時間的展望の特徴を把握し支援に繋げることは、効果的な援助方法の一つであるとであると考える。

キーワード：現在と未来を統合した未来展望、不登校生徒、不本意入学

【問題と目的】

文部科学省による学校基本調査のまとめによると、2010年度における私立・公立・通信制高校を含めた高等学校への進学率は98.0%となっており、高等学校への進学率は着実に向上していることを示している。このことは中学生の進路選択として、高等学校進学は一般的な選択肢になっていることを示していると言える。

藤平(2012)は、高校1年生の不登校生徒数と前年度からの継続率を検討した結果、前年度に不登校にある生徒が高校進学後も不登校を継続する生徒が30%いることを示している。森田(2003)は、1993年に不登校に陥っていた中学生を対象に、卒業後の追跡調査を行った。その結果、65.3%の生徒が高校進学を行っているものの、そのうち、中途退学をしたものは37.9%おり、その背景には不本意入学があることを指摘している。不登校生徒の高校進学では、入試の突破だけではなく入学後にいかに継続して登校できるかと

いう部分をおさえたい進路指導を行うことが大切であると考える。不登校生徒の進路形成は、不登校問題を考える上での課題のひとつであると考える。

生徒の進路意識を育てる要素の1つに時間的展望という概念がある。時間的展望とは、「ある一定の時点における個人の心理学的過去および未来についての見解の総体」(Lewin,1951)いわゆる“見通し”である。

都筑(1993)は、人間の行動を理解するには、個人が自分の未来をどのようにとらえ、未来において何を実現しようとしているのか、という個人の時間的展望を把握することが不可欠であると述べている。高校進学は自分の人生に関わる選択をする時期である。生徒が自分の未来をどのように考え、見通しをもつかという点はその後の進路選択に大きく影響すると考える。また、都筑(2009)は、中学校における学校適応が高校進学時の時間的展望に及ぼす影響を研究している。その結果、学校での勉強をよく理解し、学校生活を楽しみ、ストレスが少ない生徒は、自分の将来についても肯定的に捉えることができる一方で、学校での勉強がわからず、学校生活を楽しまないストレスの多い

* 栃木県スクールカウンセラー

** 岩手県立一関第一高等学校

生徒は、自分の将来について肯定的に捉えることが難しいという結果を示している。不登校生徒の心的状況を考えると学習・学校適応に難しさを抱えストレスの多い状態であると推察される。このことから不登校生徒は肯定的に自分の将来を捉えることが難しくなっている可能性が示唆される。将来が明るく見えない状態での高校入学は大きな不安が伴うと予想され、高校中退にもつながりやすいと推察される。石隈(1999)は、児童・生徒が今取り組んでいる発達課題を理解し、援助を行うことが必要であると述べている。このことから、不登校生徒の時間的展望のあり様を理解することは、不登校生徒の進路形成における有効な援助の視点であると考えられる。

本稿は、長期にわたり不登校を経験して、高校に不本意入学をした女子生徒に対して、時間的展望の理解とそれに基づいた援助を行った事例である。時間的展望の理解と援助が不登校生徒の進路形成に与える効果について考察する。

【事例の概要】

I 対象生徒の問題概要および援助期間

対象生徒はA子、私立B高校1年生、15歳の女子生徒である。家族構成は、母親(主婦、50代後半)とA子の二人暮らしである。A子は小学校4年生の時に父親が病死したのをきっかけに、その後不登校となった。小学校時代は適応指導教室に通級し、中学校に入ってから相談室登校をしていた。中学3年の時に、報告者が参加していた「不登校児童生徒支援活動(月1回)」にA子が参加し、報告者と2回活動を行った。A子は、自分が落ち込んでいたときに心の支えとなってくれた県立C高校のサッカー部に対して強いあこがれがあり、C高校への進学を希望していた。受験では、学校側の反対を押し切ってC高校を受験し、不合格となった。その後、担任のすすめでB高校へ入学したが、本人が納得した入学ではなかった。A子は、入学式の次の日から登校できなくなった。

援助期間は、200X年4月から200X年12月までであった。

II 援助者について

私立B高校は長期不登校経験者を全国的に受け入れ

ている単位制の高校である。報告者はB高校の非常勤職員であり、相談室担当であった。週に1回、8時間の勤務を行い、生徒からの面談や、相談室登校の生徒への対応を行っていた。

なお、A子への援助を行った援助者が、報告者である。

III 援助開始までの経緯

入学式の3日後に、A子の母親からB高校の相談室に勤務する報告者に「A子に関わってほしい」との依頼があり、報告者がA子に援助することとなった。A子からは、「学校に登校することができない」という訴えがあった。

IV 教育援助開始時における心理教育的アセスメントの焦点、方法と結果

1 アセスメントの焦点・方法

報告者は、学校に登校できなくなったA子の経過を明らかにして、どのような要因が絡んでいるのかを明らかにすることにした。不登校に陥っている期間が長期にわたっている点を考慮し、A子および母親に対し、家庭環境や生育史、小・中学校時代の様子について焦点をあてた面接を行った。

2 アセスメントの結果

(1) A子との面接から

担任の呼びかけで一週間ぶりに登校したA子が、担任の勧めで相談室へ来室した。A子は常に下向きで肩は強張り、うなずくなどの意思表示はあるものの会話はほとんどできなかった。相談室には他の生徒もいたため1対1で話ができる別室への移動をすすめたが、身体が固まってしまったかのように動かず移動することはできなかった。このような様子から、報告者はA子の緊張感の強さを感じた。

報告者は、A子と以前面識があり言葉を交わしたことがある報告者とも会話ができなかった様子から、A子は人との関わりに強い不安を感じていると推測した。

(2) 母親との面接から

① 家庭環境

父親が病死して以来、母親とA子の2人暮らしが続いている。母親は、A子が小学校5年生の時に不登校になったのを機にA子を心配して仕事を辞めており、家でA子と1日一緒にいる生活を続けている。A子に対してどのように接してよいかわからず、A子の様子

に合わせて生活をしている状況であった。週末には、A子の好きなC高校サッカー部の試合を2人で応援しに行くなど、常にA子と共に動いている様子が話された。

報告者はこのような様子から、A子と母親は強い依存関係にあるのではないかと推測した。

② 生育史

就学前は、身体発達面での問題はなかった。母親の記憶では、言葉の出始めが少し遅かった印象があるが、検診などで指摘を受けたことはなかった。小学校入学後はスポーツが大好きで、女の子と遊ぶよりは、男の子と一緒に遊ぶことが多かった。しかし、その様子を同級生の女子から影で言われることが多くなり、A子は大変に気にするようになった。小学校4年生の時に父親が病死した。父親っ子であったA子は大変なショックを受け、学校に登校できない日が数日続いた。そのように休むA子の様子に対して、クラスではからかいが発生し、A子はますます登校ができなくなった。クラスのからかいは、A子の休む期間が長くなるにつれてエスカレートしていき、嫌がらせの手紙をもらうなどのいじめへと発展した。その結果、A子是不登校となった。小学校6年生になってからは適応指導教室に登校するが、中学に入ってからは適応指導教室を辞め中学校の中にある相談室へ登校をしていた。しかし、毎日の登校は出来ず、家に居る日も多かった。そのような生活の中で、偶然TVでC高校サッカー部の試合を見た。A子は一生懸命頑張る選手の姿に「自分も頑張らなければ」と思うようになった。「C高校に入学し、サッカー部のマネージャーになって自分を支えてくれた選手の力になりたい」との目標を掲げ、C高校への入学を強く希望していた。C高校に入れなかったことはA子にとって大変なショックであった。それでも、気持ちを切り替えてB高校に入学したのだが登校できない日が続いており、現在の状況に母親としてとても悩んでいる様子が伺えた。

母親はA子の性格を人見知り強く内気だが、頑固であると捉えていた。またA子が、母親とは言葉や感情の交流ができるが、母親以外の人とは、相手の気持ちが気になり、やりとりがうまくできないと感じていることが示された。

V心理教育的アセスメントに基づく、教育援助の方針と計画

1 A子の問題状況に関する仮説

アセスメントの結果から、父親の死といじめはA子にとって精神的に大きなダメージであったと考えられる。それに加えて母親と常に2人きりで過ごしている生活スタイルの面も他者との感情交流の乏しさに繋がり、人と接することへの不安へと繋がっているのではないかと推測された。

また、A子がB高校への入学を納得していない面が示された。報告者は高校受験の流れから、A子が他者との関わりをほとんど持つことができていない状況の中でC高校入学後のイメージをととも適応的に捉えていた点に注目した。対人不安が強いA子にとって「C高校に入学しサッカー部のマネージャーになって選手を支える」という目標はA子の実情からは飛躍したレベルの高い目標であったと感じた。この点から報告者は、不本意入学の背景に、A子の実情にそった進路選択がなされなかった点が影響しているのではないかと推察した。

このことから、A子が登校できない背景には、強い対人不安と不本意入学の2つが要因となっているのではないかと、仮説を立てた。

2 教育援助の基本的な方針

A子の強い緊張の様子を考慮し、相談室登校を目標にして、援助することとした。具体的な援助の方針については、相談室の担当教諭を中心に担任と母親の協力を得ながら対応していく計画を立てた。

報告者は、まずはA子と報告者との間にリレーションを形成し、A子の気持ちや考えていることを聞けるようになることが重要であると考えた。そしてA子が報告者に慣れたところで、A子と相談をしながらA子のペースで相談室登校を促すという道筋を立てた。その中でA子自身が自分の課題と向き合い、目標を持ってB高校で生活できるように援助を開始することとした。

(ア)初期:A子と充分なりレーションを形成する。

(イ)中期:A子の不安を受け止めつつ徐々に登校刺激を与え、相談室登校を促す。

(ウ)後期:A子が相談室を自分の居場所と位置付けられるように援助する。

【教育援助の経過の概要】

1 リレーション形成の時期（200X年4月中旬～200X年5月中旬）

初回のA子の様子から報告者は緊張の様子を考慮し、A子の負担にならない形でリレーションをもてる方法がないか話し合った。すると、「話すよりも文章を書くほうが気持ち的に楽です。」というA子の訴えがあったので、A子の携帯と報告者の仕事用のアドレスを使ったメールでのやりとりを提案した。帰り際に、報告者のアドレスを紙に書き、封筒に入れ、宛先にA子の名前を書いて手渡すと、初めて笑顔が見えた。このような様子から、A子が報告者に対して安心感を感じてくれたと推察した。

メールのやりとりはほぼ毎日行われた。A子からは何度も「学校に登校することができない」という訴えがあった。「学校では、周りの子達と何を話したらよいかかわからない」という人との関わりに対する不安や、「私立の女の子は化粧や服装が派手である。」「私立の女の子はスカートが短い。自分はそういうふうにはできない。」「県立高校であれば、そんな女の子たちはいない。」という私立のB高校への固定したイメージも話された。そしてB高校への不安が強いことから、「B高校を辞めて別の高校へ行きたい。」との意思表示があった。

報告者はA子の不安を受け止める関わりをメールを通して行った。また、A子が楽しめる場であれば直接会って話ができるのではないかと考え、A子の好きなC高校サッカー部の試合を一緒に見に行く活動を行った。試合観戦ではA子にB高校内で見た身体や表情の強張りはなく、常に笑顔が見え、楽しんでいる感じが感じられた。選手の名前を自発的に私に教えてくれるなど和やかに過ごすことができた。好きなTV番組や芸能人、普段何をして家で過ごしているかなど、サッカー以外の内容についても自然に会話をすることができた。報告者はこの活動に効果があると感じ、メールと試合の見学を柱としたリレーション形成に努めた。

2 相談室登校開始（200X年5月中旬～200X年7月）

援助を開始して1ヶ月ほどするとA子と言葉のやりとりが自然にできるようになった。そこで、相談室登校を促すために、A子の登校を妨げる要因とな

っているB学校へのネガティブなイメージへの介入を行った。イメージではなく現実を知る事を重視し、放課後に学校内を見学しながら学校の実際の様子を確認したり、学校のパンフレットを見ながら学校の理念とそれに基づくカリキュラムの特徴等を説明した。このような話をする中で、A子のB高校への認識は徐々に変化していき、相談室登校への意欲が示されるようになった。依然として学校に対して不安が残るA子に対して、報告者が勤務する曜日のみの登校を提案し、週に1・2回のペースで午前中のみ登校を続けた。それと同時にA子の対人不安の強さを考慮し、担任と早い段階からリレーション作りが必要であると考えた。そこで、担任とA子と報告者で交換ノートを行った。A子は交換ノートにC高校のサッカーの試合について熱く語るが多く、担任と報告者はその内容に共感的に対応することを心がけた。また、担任からはA子の好きなものや嫌いなものを問いかけ、その内容に担任が自己開示を含めながら返事を返すことで感情交流を図っていった。そのやりとりが続く中でA子から「勉強をしていると安心できる」との話題があった。担任と報告者はこの話題から個別指導の場である「学習支援室」の要請を学校へ申し入れた。A子は当初「学習支援室」での個別指導に乗り気であったが、話が本格的に進むにしたがって登校ができなくなった。報告者が登校できない理由について尋ねても返事がなく、はっきりとした原因がつかめない状況が続いた。そこで「学習支援室」の話は一時中断とし、再度安定した登校の確立を目指した。登校が回復した後にこの時の心境を再度尋ねると「話がおおごとになったと感じて不安になった。」と教えてくれた。このことから報告者は、A子の不安を感じやすい面とそのような不安を母親以外に話せず閉じこもってしまう面があると感じた。

A子は、その後も相談室登校を続けたが、人との関わりに対する不安は継続していた。この部分を解消できるように、報告者と1対1で行うソーシャルスキルトレーニングや相談室登校の他の生徒とのエンカウンターに誘ったが、参加できないとの意思表示があった。報告者は、A子が他者と関わる場面を作りたいと思いつつも、不安が高まるとA子の登校が不安定になる様子から、他者との関係作

りの問題には時間を掛けた対応が必要であると感じた。A子は、報告者や担任とのリレーションが深まっていくにつれて登校が安定するようになった。それにつれて、報告者と一緒であれば相談室内の他の生徒と顔を合わせて過ごすことができるようになった。

7月に入り突然A子から「クラスでもがんばりたい」という意思が示された。報告者は、いまだ他の生徒と自分一人では関わりを持つことのできないA子にとって、クラスに戻ることは早いと感じた。しかし今まで学校生活に消極的であったA子からの前向きな発言であったことから、クラスに参加する作戦をA子と話し合った。B高校は単位制の高校であることから、授業ごとに履修人数にばらつきがあった。そこで、相談室を基点として人数の少ない授業に出席し、疲れたときには無理をせず戻ってくることを約束した。また、SHRを廊下から一緒に見学し、雰囲気慣れたところでクラスの中に入る段取りを立てた。SHR開始時には担任に相談室に迎えに来てもらい、リレーションのある担任と事前に会話をする中でA子の不安を軽減する働きかけを行った。このような活動を通し、A子は夏休み前の一週間は1人でSHRや特定の授業への参加を行うことができた。

3 自己理解を深めた時期 (200X年8月~200X年11月中旬)

夏休み明けの面談で、「C高校を再受験したいので、B高校を辞めたい」との思いが語られた。A子は「C高校に入学しサッカー部のマネージャーをやる」という目標を強く持っていた。そして、「ともかくC高校に入りたい。入れれば自分は変わる。」と考えていることが示された。報告者は、A子のC高校への思いは強く、C高校で高校生活をやり直すことを強く望んでいると理解した。しかし、C高校へ入るための学力、入ってからの対人関係については「入ればすべてがうまくいく」という内容で、客観性のない理想的な未来志向が強く、現在の自分には振り返られていない様子が見られた。C高校のサッカー部では女子のマネージャーはとっていないという事実が判明しても、「本当かどうか入って見なければわからない」という返答で、A子の現実を思考する力の弱さが示された。

報告者は、「高校生活をやり直したい」というA子の思いを受け止めつつも、高校入学後の未来について現在の自分の状況をふまえた具体的な思考が開かれなかった点に注目した。A子の思考から、A子が現在の自分の状態を把握する力は未熟であること。また、現状から飛躍した未来志向を持っている点が課題になっていると感じた。そこで、すぐに再受験に向けた取り組みを始めるのではなく、まずはA子が自身の自己理解を深めることが必要であると考えた。そして自分の課題をふまえた上でその後の進路を検討することで、現在と未来が繋がった未来展望を持つことができると考えた。そこで、話し合いを重ねる中でA子が現在の自分をしっかりと内省し、その上でこれからの生活を考えることができるように援助を計画した。

報告者は、C高校を受ける理由が「行きたいから」だけでは考えが未熟であることをA子に伝えた。そして、再受験をする意味を含めてじっくりと考える活動を提案した。面談の中では現在の学力や人との関わり方などにふれ「実際に今の自分の生活はどんなのか」という語りかけを多く用い、A子が自分自身の振り返りを行えるようにした。また、「新しい高校に入学するためには何が必要なのか」という質問をすることで、先のことを見通して今何をすべきなのかについて考えることを促した。加えて、自分の学力を確認するために県立高校のプレテストへの参加やC高校の情報収集などを提案した。

A子はこれらの活動にとっても前向きに参加した。A子様子からは「この活動を行えばC高校に入れる」という思いが感じられた。しかし、情報収集の中にはA子が期待していた答えと違うことも多くあり、A子はその度に暗い表情を見せることがあった。また、他者と関わりを持つという自分の課題に直面し、「不安だけれど関わらなければいけない」と葛藤している様子が見られるようになった。このような不安が喚起される状況であってもA子の学習への取り組みは続き、B高校への登校は安定していた。報告者は、A子が苦しみながらも現実と向き合い、今後の生活について実情をふまえた思考をし、行動を始めていると感じた。そこで担任と相談をし、プレテストの結果の出る11月にその後の進路について話し合う場を設定することとした。メンバーは、

A子、母親、担任、報告者で行うこととした。

4 将来目標を獲得した時期(200X年11月中旬～200X年12月)

プレテストの結果から、C高校の判定はE判定と示された。報告者はプレテストの結果の詳しい読み取りを行い、この状態での合格は難しいと考えられることを伝えた。他者と接することへの不安も完全には解消されていない点を伝え、A子の現状の共通理解を行った。担任からは「B高校でもう少し一緒に頑張ってみないか」という励ましがあつた。しかし、A子のC高校への再受験の意思は固く「再受験をします」との意思表示があつた。母親からはA子の現状に不安を感じている気持ちが話されたものの、「本人の意思を尊重します」との話であつた。報告者はA子の現実を思考する力の弱さを考え「落ちるとわかっていても受けるのか」という直接的な問いかけを行ったが、A子からはただ首を傾げる反応があつた。

しかしその後の面談で、A子の思いが以前のように理想的な未来志向だけで語られる事がなくなった。A子は「C高校への受験について、私はすごくこだわっていると思う。ともかく入れれば、私は変われるとずっと思ってきた。でも、C高校でなくてもやりなおすことはできるんですよ。」「C高校にこだわるのは、中学の同級生が他校のサッカー部のマネージャーをやっているのを偶然に見かけたから。サッカーに興味のなかった子がマネージャーをやり、やりたい自分ができていない現状が悔しかったからだ。」と今までの自分を語った。また、「C高校にも自分が苦手としている服装が派手な子はいらぬと思う。苦手なままだとC高校にも登校できなくなるかもしれない。」など自分が抱える課題が今後にも与える影響も考えるようになり、「学校(B高校)を辞めないほうがいいのかな。」との思いも聞かれた。このような様子から報告者は、A子が「C高校にこだわる自分」を客観的に振り返り自己理解を深めていると推察した。その上で現在の自分をふまえた今後の生活を具体的に考え始めたと推察した。

その後、A子は中学3年の受験を振り返り「あの時の受験は、“C高校に入ったらこんなことをしたい”と考えてばかりいた。ほとんど勉強はできなかった。

た。」と当時の自分について話した。その上で「精一杯勉強をしたうえで再受験をすることは自分にとって何か得るものがある」という考えを示すようになった。報告者は、A子が理想的な未来志向で現在の行動を決めているのではなく、過去や現在の自分をふまえて将来を考えた結果、「受験」という行為自体に意味を見いだしていると推察した。12月初め、「ここまでがんばってきて、あきらめることはできない。受験に落ちるとわかっていても受けます。」という本人の決意が示され、12月いっぱいB高校を退学となった。

A子の退学を受け、報告者の関わりは終結した。

5 その後

A子は、退学後C高校の受験は不合格であつた。しかしすぐに次の目標をスポーツトレーナーと定め、高卒認定試験を合格した。その後、専門学校への入学を決めている。

【考察】

1 時間的展望の理解と援助方針

佐々木(2005)は、学校へ行きたくないと感じている生徒の目標意識の特徴として、日々の時間管理や長期的な計画性の思考は乏しいが将来目標を持ちたいと強く考えており、その結果「未来はきっと何とかなる」という楽観的な未来志向に逃避する可能性を示唆している。このことから、不登校生徒の将来目標に関する思考は、具体的な認知的判断を伴わない、楽観的な思考になっている可能性が考えられる。しかし、現実的に課題を抱えている不登校の生徒にとって、高校入学により課題が一気に解決される可能性は低い。想像していた将来と現実のギャップが、不登校生徒の高校中途退学率の高さに繋がっているのではないかと推察される。

本事例において、長期的な不登校を経験しているA子の時間的展望の特徴は、佐々木(2005)が述べた結果を示すものであつた。報告者は、A子の時間的展望の特徴を理解し、再受験を支持する援助ではなく、A子の自己理解を深め現実をふまえた将来目標を獲得する援助を行った。その結果、最終的にはB高校を中途退学したが、それは内面的な成長を伴ったものであつた。これは、A子の持つ将来目標の

楽観性に気づき、援助を行った結果である。このことから、不登校生徒の進路形成の援助にあたり、生徒がどのように将来を考え、将来目標を獲得したのかを理解することで、生徒に必要な援助方針の獲得に繋がると考える。

2 時間的展望の視点による援助が進路形成に与える効果

白井(1985)は、小学生・中学生・高校生を対象とした調査から、児童期は現在とは切り離された「あこがれ」のような未来志向を示すのに対し、青年期は未来と現在の結びつきを基礎にした現在志向の特徴を示すことを明らかにしている。また、都築(1993)は、過去・現在・未来の時間的な流れの中での自己についての継続性や統合性の意識の上に初めて自我同一性が確立されると述べている。このことから、中学生の進路形成の援助にあたり、現在と未来の統合は重要な視点であると考えられる。本事例において、楽観的な将来目標を掲げるA子に対して報告者は、時間的展望の視点から、現在と未来を統合した上での未来展望の獲得を重視した。援助として、A子の自己理解を深める語りかけを多く用いた。また実際に資料を集める、自らの力を把握する、などの活動を通して、将来目標の具体的な思考を行った。その結果、現在の自分の状態を正確に認識した上で今後の生活をどうするかという連続性のある思考を導き出すことができた。その上、自己理解が深まったことで内面的成長が促進された。このような現在と未来の統合の重要性は、「未来のために今をどのように生きるか」というキャリア教育の視点からも実証されている。現在と未来を連続性のあるものとして捉え、今の自分が将来に繋がるという意識を持つことは、進路意識を高め、進路形成の促進に繋がると考えられる。

また、将来に対する具体的な思考は、不登校問題にも効果があると考えられる。杉山(2000)は、現在のみならず未来が、個人の現在の適応を規定する要因として重要であると述べている。現在と未来が統合され、将来目標が明確な状態では、日々の生活に向かう動機が高くなると推察される。一方で、現実の問題が起きた際には、未来のためにそれを解決していかうという動機が高まると推察される。進路意識の向上は、不登校問題に対する予防と対応の両方の

側面を担っていると考えられる。このことは、不登校生徒の不本意入学という進路問題の解消にも繋がると考えられる。

山田・宮下(2008)は、単に「学校へ行くこと」を不登校の支援目標にするのではなく、その先にある社会での自立・適応を目標とした、長期的視野に基づく支援が求められていると述べている。現在と未来を統合した将来目標の獲得は、不登校生徒の進路形成において、有効な教育的介入プログラムになる可能性が示唆される。

3 長期不登校経験者への早期のリレーション形成が援助に与える効果

本事例は、A子の相談室登校という援助目標から始まった。この目標はA子と報告者との強いリレーション形成の結果、相談室を自分の居場所として確立することで達成できた。また、A子が気持ちを話せる存在に報告者になったことで、「再受験をしたい」というA子の気持ちの変化を聞き出すことができた。そしてその背景にある現在と未来が統合されていない未来展望の存在に気づくことができ、新たな援助を開始することができた。その結果、A子の自己理解は深まり、A子の内面的成長を引き出すことができた。このように当初の援助目標が達成され、またA子の新たな課題に気づき早急に支援を開始することができた背景には、A子と報告者とのリレーションの形成が早い段階でうまく行えた点が大きいと考えられる。

リレーション形成の始まりとして、A子にとって抵抗の少ないメールの方法を用いた。この方法は、A子にとって無理なく安心して行える方法であったと考える。また、平行してC高校サッカー部の試合観戦を一緒に行った。これは基本的な支援の場である高等学校を離れた支援であった。高塚(2004)は、兄弟関係や友人関係を通して獲得する「他者性」の意義を述べ、人間関係の基礎となる他者との二者関係の重要性を述べている。この中で、他者との二者関係における信頼感を有することの心地よさを十分に体験していない者は、他者に対する警戒心と脅えが全面に出やすく、密なる人間関係が必要となる場面に直面すると不安感を募らせていくと述べている(高塚, 2004)。A子は長期間の不登校の経験から母親のみと接する生活が続いていた。その生活

は母親がA子の気持ちにすべて合わせる形で維持されており、A子が「他者性」を獲得する機会が少なかったと推察される。その中で、報告者がA子の状態に合わせた柔軟なリレーション形成の方法をとったことは、A子と報告者との早期の二者関係形成に繋がったと考える。これは対人不安の強いA子にとって大きな安心感となったと考える。このリレーションがA子との繋がりの柱となり、その後の担任とのリレーション形成やA子の自己理解の深まりに繋がった。

このことから長期の不登校を経験している生徒とのリレーション形成では、実態に即した柔軟なリレーション形成の方法を取り、早期に関係性を築くことが重要であると考えられる。

3 まとめと課題

本稿では、時間的展望の理解と援助が不登校生徒の進路形成に与える効果を検討した。その結果、現在と未来が統合された未来展望が獲得され、内面的な成長が確認された。また、不登校問題の予防と対応の側面や不本意入学という進路問題を回避する方法としても有効性が示唆された。このことから、不登校生徒の持つ時間的展望の特徴を把握し、支援に繋げることは効果的な援助方法の一つであると考えられる。

今後、時間的展望の視点を活用した教育的介入プログラムの開発や、その効果に関する研究が報告されることが課題であると言える。

【引用文献】

- 藤平 敦 2012 不登校・中途退学の調査結果について 教育委員会月報, 64, 10-16.
 石隈利紀 1999 学校心理学 誠信書房
 Lewin,K. 1951 Field Theory and Social Science. New York : Harper. 猪俣佐登瑠 (訳)
 (1974) 社会科学における場の理論 誠信書房
 文部科学省 2009 平成20年度児童生徒の問題

行動生徒指導上の諸問題に関する調査

- 文部科学省 高等学校の現状について
 森田洋司 2003 不登校—その後 教育開発研究所
 佐々木佳穂 2005 登校回避感情を有する生徒の時間的展望 (Temporal Perspective) 岩手大学大学院教育学研究科修士論文
 杉山 成 2000 未来展望の発達傾向とその関連要因の検討 小樽商科大学人文研究, 99, 39-60.
 白井利明 1985 児童期から青年期にかけての未来展望の発達 大阪教育大学紀要, 34, 61-70.
 高塚雄介 2004 不登校の子どもの「時間的展望」 児童心理, 58, 金子書房
 都築学 1993 大学生の時間的展望 中央大学出版部
 都築学 2009 中学校における学校適応が高校進学時の時間的展望に及ぼす影響の検討
 山田裕子・宮下一博 2008 不登校生徒支援における長期目標としての自立とその過程で生じる葛藤の重要性の検討 千葉大学教育学部研究起用, 56, 25-30.

(2013年11月14日 受稿, 2014年1月7日 受理)

*A Support Case of Non-Attendance Student who Unwillingly Enters High School
: From the Viewpoint of the Future Perspective which Unified the Present and the Future*

Kaho Kimura (School Counselor of Tochigi Prefecture), Hayato Karimazawa (Ichinoseki Daiichi Senior High School)

This example is an example which the reporter who works as the part-time-service personnel of a consultation room helped to the non-attendance woman student at the private high school in which many non-attendance students are accepted. The social anxiety and the unwillingly enters high school a background occurred, and there was hope of re-taking an examination to other schools. The reporter offered assistance from the time perspective to the time view to a woman student's future. At the beginning, a woman student's future perspective was an optimistic future intention which is not based actually. Then, the reporter performed activity which will think of concretely in the future, and aimed at acquisition of the future perspective after unifying the present and the future. As a result, when its state had been recognized correctly, thinking with the continuity "what to do henceforth" was able to be drawn. Moreover, internal growth was promoted by introspecting the present more deeply. It was shown that the concrete thinking about the future which unified the present and the future is an effective method in the non-attendance students career formation. I think that the time perspective which a non-attendance student has is grasped and it sometimes ties that it is one of the effective assistance methods to support.

Key word : the future perspective which unified the present and the future,
non-attendance student, unwillingly enters high school